

紙銭習俗の源流としての瘞銭について

—唐代の紙銭と瘞銭の比較を中心に—

佐藤 大樹

はじめに

駒澤大学禅文化歴史博物館には、100点以上に及ぶ紙銭が収蔵されている。この資料群は、文化人類学者窪徳忠氏から寄贈を受けたもので、1980年代から1990年代にかけて東アジア各地で収集した道教関係資料の一部である^(註1)。

紙銭は、中国をはじめとする東アジアで神仏の参拝や祖先、諸霊への供養などに際して用いられる紙製のお金である。紙銭の特徴はその使用方法にあり、火をつけて焼くことにより現世から冥府へと送られる。焼く際の数量は多ければ多いほど良いとされ、販売する際も1枚ずつではなく札束状で売られるのが一般的である。この大量生産・大量消費を旨とする紙銭は焼いて使用するという性格上、後世に残りづらく、当館所蔵の紙銭は、その時点・その地域という「点」における紙銭習俗を保存した貴重な資料といえる。

さて、中国の歴史上、紙銭が最も早く文献史料に現れるのは唐代のことである。封演（726～790？）『封氏見聞記』には「今代送葬為鑿紙銭、積銭為山、盛加彫飾、昇以引柩。（中略）古埋帛、今紙銭則皆焼之、所以示不知神之所為也。（今代葬送するに紙銭を鑿つを為す。銭を山とし盛んに彫飾を加え、^{かつぎ}昇て、以て柩を引く。（中略）古は帛を埋め、今紙銭は皆之を焼き）」^(註2)とあり、唐代にはすでに現代と同様に葬送儀礼の中で大量の紙銭が使用されていたことが知られる。また、唐代の小説や詩の中には、紙銭を題材とするものも多く、唐代には紙銭習俗がある程度盛行していたと見ることができる。

それでは唐代遺跡における発掘調査により得られた実物資料の中に紙銭が存在するかといえば、実はほとんど確認されていない。元々、紙銭は焼いて使用し、また焼かずに墓に入れた場合でも紙という素材である以上、残存する可能性は高くはない。そのため、唐・宋の時代から続く「紙銭習俗の開始はいつか？」という議論について、未だ決着を見ていない。

この実物資料の乏しい唐代の紙銭について考古学の立場から検討を行う際、その手段として2点を挙げるができる。1点は、唐代以前における紙銭の唯一の出土事例である新疆吐魯番地区の紙製明器群を検討すること。2点は、紙銭の源流とされる瘞銭^(註3)から紙銭を検討していくことである。前者については、近年多くの研究がなされており第1章において紹介する。後者については、瘞銭の研究自体が考古学の研究の中であまりなされていない。これは、唐代に限ったことではなく、中国においては銭貨出土墓の事例数が多く全体像が把握しにくいことと、大量生産品である銭貨は基本的には重量やつくりが均一であることから研究対象として考古学的な興味を惹かないことが要因と考えられる。ただし、前掲『封氏見聞記』の中に「古者享祀鬼神有圭璧幣帛、事卒則埋之、後代既宝銭貨、遂以銭送死。『漢書』称“盜發孝文園瘞銭”是也。」とあるように、古くは鬼神（祖先神）を祀るため圭璧幣帛を埋め、後に銭貨を埋めるようになり、紙が発明されると銭貨の代用品として紙銭を使用するようになったとする発展史において紙銭の前段階である瘞銭について正確に把握をすることはきわめて重要である。また、紙銭の前段階とは言いつつも、紙銭が出現した後も瘞銭は、それまで同様に行われていく。つまり、紙銭が瘞銭に取って代ったというわけではなく、瘞銭全体の中のある部分が紙銭に変化したと捉える方が妥当である。

本稿では、紙銭とその源流である瘞銭の比較を、唐代を対象として行う。第1章では、唐代の紙銭について文献史料や小説・詩の中から取り上げ、また新疆吐魯番地区の紙製明器群の中の紙銭について紹介する。第2章では、唐代の瘞銭について、唐代の銭貨出土墓の集成結果をもとに検討を行う。唐代における紙銭と瘞銭について、両者を比較するこ

とにより、出現期の紙銭の姿を鮮明に捉えることができれば幸いである。

1. 唐代の紙銭について

(1) 紙銭の出現時期について

紙銭の源流である瘞銭を辿っていくためには、まずは出現期の紙銭というものを明らかにしておく必要がある。ただし、紙銭がいつ出現したかについては諸説あり、まずはその議論から見ていくこととする。

文献史料の中に紙銭が登場する最古の事例は唐・封演（726～790？）『封氏見聞記』の中に「今代送葬為鑿紙銭、積銭為山、盛加雕飾、昇以引柩。按、古者享祀鬼神有圭璧幣帛、事卒則埋之、後代既宝錢貨、遂以錢送死。『漢書』称“盜發孝文園瘞銭”是也。率易從簡。更用紙銭。紙乃後漢蔡倫所造、其紙銭魏晉南北朝以来始有其事。今自王公逮於匹庶、通行之矣。凡鬼神之物、取其象似、亦猶塗車芻靈之類。古埋帛、今紙銭則皆燒之、所以示不知神之所為也。」とあるもので、紙銭の起源は鬼神（祖先神）を祀るために墓に埋められた圭璧幣帛であり、後に埋納物が錢貨へとかわり、更に後漢代に蔡倫によって紙が発明されると魏晉南北朝時代には錢貨の代用品として紙製の紙銭が出現したという唐代の認識を知ることができる。

出現時期を更に限定する説として、東晋・殷長史説と南齊の廢帝・東昏侯説がある。宋・戴埴（不明）『鼠璞』^(註4)は『法苑珠林』「紙銭起於殷長史也」を引用しその開始時期を東晋・殷長史とする。しかし、現存する『法苑珠林』にその記述はなく、江戸時代の著作である道忠禪師（1653～1744）『禪林象器箋』^(註5)は、『法苑珠林』巻10に載せられる唐・睦仁菴の記事中に鬼となった胡国の長史・成景（成長史）に実物ではなく仮の金銭絲絹を贈った話を取り上げ、元は「成長史」と紙銭を結び付ける記述が文字の上部欠損などの理由で「成」と「殷」を誤読し「殷長史」となったと指摘する^(註6)。一方、この殷長史を肯定する立場として陳啓新1996「冥紙史考」^(註7)は「殷長史」を殷仲堪（？～399）に比定する。『晋書』「殷仲堪伝」^(註8)には「仲堪少奉天師道、又精心事神（中略）及玄来攻、猶勤請禱」とあり、天師道^(註9)の信奉者であったことが分かる。道教の源流とされる天師道には紙に文字を書く字符があり、これを紙銭の開始と結びつけたものであるが、「殷仲堪伝」の中に紙銭に関する記述はない。また、「殷長史」を殷仲文（？～407）とする説^(註10)もあり、「殷長史」と呼ばれる人物の解釈も一様ではない。

南宋・葉釐（不明）『愛日齋叢抄』巻5は「予觀洪慶善『杜詩辨証』、載『文宗備問』云、南齊廢帝東昏侯好鬼神之術、剪紙為錢以代帛。至唐盛行其事、云有益幽冥。」とし、南齊の廢帝・東昏侯（483～501）の時期に紙銭が存在していたとする。しかし、『南史』「東昏侯本紀」^(註11)には紙銭に関する記載はなく、『愛日齋叢抄』の紙銭の記載を全面的に信じることはできない。

また、紙銭の出現時期を唐・王瓊（？～768）とする文献も多い。『新唐書』巻109「王瓊伝」^(註12)には「漢以来葬喪皆有瘞銭、後世里俗稍以紙寓銭為鬼事。至是瓊乃用之」とあり、漢代以来の瘞銭の習俗が後世に紙寓銭を以て鬼事に当たるとなり、王瓊に至りこれを用いたとする。

朱熹（1130～1200）『朱子語類』^(註13)「紙銭起于玄宗時王瓊。（中略）而鬼神事繁、無許多銭来埋得、瓊作紙銭易之。」、王応麟（1223～1296）『因学紀聞』^(註14)「案紙銭始于開元二十六年、王瓊為祀祭使、祈禱或焚紙銭、類巫覡、非自五代始也。」など宋代の学者たちは『新唐書』の記載に依拠し、紙銭の使用の開始を唐・王瓊とし、その時期は玄宗の開元年間であったと認識していたことが分かる。同じ宋代の人物ではあるが、歐陽脩（1107～1172）は『新五代史』「周本紀」^(註15)の「寒食野祭而焚紙銭、居喪改元而用樂、殺馬延及任園、則礼樂刑政、几何其不環矣」を根拠とし紙銭の使用開始を五代とするが、許飛2010「唐代小説にみえる「紙銭」について」^(註16)が示すように唐代の詩や小説の中で紙銭を題材としたものがすでに登場していることは明らかであり、紙銭習俗の開始を唐代以降とする説は成り立たない。

以上のように、紙銭の出現期についてはさまざまな見解が存在する。これらの諸説を包括する解釈として徐乾学（1632～1694年）『讀禮通考』^(註17)が引く『李濟翁資暇録』は「南齊東昏侯好事鬼神、剪紙為錢、以代帛、李淳風盛行其事（中略）則是喪葬之焚紙銭、因于漢世之瘞銭。其禱神而用紙銭、則起自殷長史、盛行于李淳風、王瓊也」とし、南齊・東昏侯

が漢代の瘞銭の代用品として剪紙により銭を作ったのが紙銭の始まりであり、紙銭の習俗が盛行し宮中で行われるまでになった時期が唐代の李淳風（602～672）、王璵の頃と捉えており、諸説は必ずしも矛盾しないことを示している。

以上のように、紙銭の出現時期についての議論は、唐・宋の時代からなされてきたが、未だ定説はない。ただし、歴史書の中の議論とは別に、唐代の詩や小説の中には紙銭を題材としたものを多く確認することができる。次節では唐代の詩や小説の中に見える紙銭について紹介していく。

（2）唐代の詩・小説の中の紙銭

唐代の寒食節には墓参りの風習があったとされる。この日には官人たちも清明節と合わせて4日間の休暇をもらい墓参りへと出掛けたという。この寒食節の墓参りの情景は、詩の題材となり、その中に紙銭の描写を見ることができる。

陳啓新1996は唐代中期以前の詩中に登場する紙銭は、寒食節に墓に掛ける紙銭に関するものとし、その要因として唐代には寒食節に火を使うことが禁じられていたことを挙げる。白居易（772～846）『寒食野生吟』^{（註18）}の「丘墟郭門外、寒食誰家哭、風吹曠野紙錢飛」や王建（？～830）『寒食行』^{（註19）}の「三日無火燒紙錢、紙錢那得到黃泉？」などは本来ならば焼いて灰になるはずの紙銭を、火を使えない寒食節の墓参りという特殊な状況下で題材としたものである。ただし、余欣2012「冥幣新考：以新疆吐魯番考古資料為中心」^{（註20）}は白居易の詩にある紙銭は買路銭として虚空に撒かれたものとする。王建の事例からは紙銭を黄泉に送るためには本来であれば焼くという行為が取られる、もしくは不可欠であるという意識を読み取ることができる。また、陳啓新1996は、唐代後期になると寒食節の1～2日後の清明節の墓参りには紙銭を焼く行為が解禁となり、各地の廟などでも紙銭を用いた祭祀が行われるようになったとし、王叡（不明）『送神』「紙錢灰出木綿花」（全唐詩21. 79上）、李山舗（不明）『雨後過華岳廟』「牆外素錢飄似雪」（同643. 1620上）、吳融（不明）『野廟』「野風吹起紙錢灰」（同684・1724中）などを挙げる。

趙叡才・楊広才2005「紙銭考略」^{（註21）}は隋から初唐の人物である王梵志の詩中に「死得紙錢送」「空得紙錢送」など人の死に際し葬送儀礼の中で紙銭が使用されている事例を紹介し、この背景には初唐以前からの紙銭習俗の民間への広まりがあると指摘している。

唐代における紙銭習俗の広まりと仏教には密接な関係があると考えられている。「紙銭習俗考」^{（註22）}は、瘞銭から紙銭習俗に変化した要因は単に簡便だということではなく、中国に仏教が伝来し荼毘の教えが流行したことがあると指摘する。実際に、唐代小説において紙銭が登場する『冥報記』『広異記』『通幽記』などは仏教思想を背景とした因果応報や地獄の情景、冥府からの生き返りなどを題材とした書物である。この中で、小説に紙銭が登場する最初の事例である唐臨（600～659）『冥報記』の中の紙銭の描写について見ていくこととする。

『冥報記』は初唐に編集された仏教説話集で、その内容は仏教思想を反映した因果応報や救済、死後の世界（特に地獄）と人の世界との行き来などが描かれ、日本の仏教説話にも大きな影響を与えた。現存する『冥報記』（前田家尊經閣蔵本〈説話研究会『冥報記の研究』〉^{（註23）}の中で紙銭が登場する説話は、中巻18話「唐の右監門校尉李山龍が法華經を讀誦して閻魔庁から蘇ったこと」、下巻23話「唐永徽二年に都官令史王薦が冤罪を晴らして冥府から蘇ったこと」がある。

中巻第18話「唐の右監門校尉李山龍が法華經を讀誦して閻魔庁から蘇ったこと」では、俄かに亡くなってしまった李山龍は冥府にて閻魔との問答において法華經を讀経し地上に帰ることを許される。その帰り道、三鬼より贈り物を求められる。「何処に之を送るということを知らず」という李に対し、三鬼は「水辺若しくは樹下にして之を焼け」と答えている。生き返った李は「後に日紙を剪りて銭帛を作り以て酒肉に併せて自ら水辺に送り之を焼く」と「忽ちに三人の来たるを見る」とある。ここで重要となるのが紙銭の製作方法と紙銭を焼くために最適な場所が示されている点である。

まず紙銭の製作方法について、陸錫興2010「唐宋時期的紙銭風俗」^{（註24）}は剪と刻が常用されるとする。剪とは剪刀（鋏）を使用し紙を切り出す方法である。現在のような支軸式の剪刀の出現は五代・宋とされ、唐代以前の剪刀は柄部を折り曲げて刃部を交差させる形式であり、紙を切るためには多大な労力を要したと想像される。一方、刻は刻刀により紙に銭の形を刻むもので、複数枚の紙を重ねて一度に多くの紙銭を作ることができ、作業効率では剪を上回る。次に、紙銭

を焼く場所について三鬼は水辺が最も適しているが水辺のない地域では樹下でも良いとしている。

下巻第23話「唐永徽二年に都官令史王璿が冤罪を晴らして冥府から蘇ったこと」は、冥府にて冤罪を晴らし現世に戻った王璿という人物の説話である。王璿は無実を証明し、現世に帰れることになったが、その道が分からなかった。そのため、使者に賄賂を送ることを条件に帰り道を教えてもらった。この際、使者は「吾汝が銅銭を用い〔不〕じ帥白紙の銭を欲するのみ」と告げる。結局、現世に戻った王璿は賄賂を送るのを忘れ、再度気を失い、次こそは確実に送ることを約束し再び生き返る。生き返るとすぐに王璿は家人に告げて紙百張を買い銭を作り送らせる。しかし、この銭も使者の求めとは異なり「君幸ひ二能く我に銭を与ふれども〔而〕銭好からず」と紙質に問題があったようである。また、許しを請い生き返り、「廿日に至りて薦六十銭を用いて白紙百余張を買ひて銭井びに酒食を作らしむ。自ら隆政坊ノ西門ノ渠水の上（ほとり）にして〔於〕之を焼く」とようやく身体が癒えた。ここでは冥府では銅銭を用いず白紙から作った紙銭が好まれること、また紙質にも条件がつくということが分かる。

『太平広記』巻385引『河東記』^(註25)の辛察の説話では、冥府に連れて行かれた辛察がお金を出せば放してやると賄賂を持ちかけられる。辛察が貧乏でお金がないと答えると欲しいのは紙銭であると告げられる。その後、家族に紙銭を焼くように頼んだ辛察は「于是其家果取紙銭焚之、察見紙銭焼訖、皆化為銅銭。」とあり、現世で焼いた紙銭が冥界では銅銭へと変化するのを見る。これとは反対に、許生^(註26)の説話には幽鬼が酒を買うために支払った銅銭が翌朝には紙銭に変化している。楊元英^(註27)の説話では20年前に死んだ楊元英が息子たちと出会いお金を渡す。数日中に使い切れと命じられた息子たちが市場でそのお金を使い果たすと、その三日後お金は紙銭に変化していた。これらの事例は、現世で紙銭であったものを冥府に送ると銅銭になり、反対に冥府から現世に送れば紙銭に戻ることを示す。ただし、この法則は前掲『冥報記』王璿の説話の、使者が紙銭の紙質に拘る姿とはやや矛盾するように感じる。紙銭の紙質については、『河東記』の許琛の説話に「深愧每患銭物、然皆碎惡、不堪行用。今此有事、切要五萬張紙銭。望求好紙燒之。」とあり、いつも紙銭を送ってくれるのはありがたいが、紙質が悪く使用に堪えないため、良い紙で作られた五万張の紙銭が欲しいとしている。この事例では、冥府に送られた紙銭は銅銭に変化せず、紙銭のまま通用していることを想起させる。

もう1つ触れておかねばならないのが『冥報記』の中で最も長編とされる中巻第14話陸仁蒨の説話である。陸仁蒨は邯鄲の人で、元来儒学者であるため鬼神の存在を信じていなかった。しかし、陸は冥界の臨胡国長史成景と出会い親交を結ぶこととなる。その後、陸は、邯鄲令岑之象の子：文本の家庭教師になり、成景との関係を打ち明ける。文本は成景と百余の鬼を饗応し、成景より感謝を受ける。数年後、陸が病気になり成景に原因を尋ねると、冥界の役職に欠員が出て陸が候補に挙がっており、選ばれれば陸は死ぬことを告げられる。成景により泰山府君に訴えるよう勧められた陸であるが、間に合わず代わりに文本から銭三千を出してもらい仏画を奉納することにより死を免れるという説話である。

この説話の中で成景を文本が饗応する場面において、陸が次のように告げている。「鬼の用するところは人と異なれり。唯黄金及び絹は為に通用することを得。然るに亦仮の者に如かず。黄色を以て錫^(註28)に塗りて金に作りて紙を以て絹・帛と為すを最も貴上と為す」。これを聞いた文本は「文本作れる金錢糸絹を以て之を贖^{おく}り、成景より感謝を得る。ここでは、冥界では金・絹は実物であっても通用するが、それ以上に錫や紙で作った代用品の方が好まれていたことが分かる。

ここまで、『冥報記』を中心に、唐代の詩や小説に見られる紙銭について見てきたが、詩に登場する紙銭は、実際に使用している情景を写したものであり、小説では紙銭を使用する思想的、宗教的な意味合いというものを知らることができる。簡単にここまで見てきた内容を纏めると以下ようになる。

- I. 唐代中期以前の詩中に登場する紙銭は寒食節に墓に掛けたものであった。また、火を使うことのできない寒食節など特殊な状況を除けば、紙銭は焼いて使用され、焼くことで冥府に送られると考えられていた^(註29)。
- II. 紙銭を送るには水辺が最適であり、周辺に水辺がなければ樹下でも良い。

- III. 紙銭を欲しがるのは主に現世と冥府の仲介役となる使者たちであり、この使者への賄賂として紙銭を渡すことにより、主人公は現世に戻ることができる。
- IV. 現世から紙銭を送った時、冥府では紙銭のまま通用する説話と、冥府に送られた紙銭が銅銭に変化する説話がある。また、冥府で銅銭に変化していた紙銭は、現世に持ち帰ると一定期間の後、元の紙銭に戻る。
- V. 紙銭の製作方法は剪と刻があったとされるが、『冥報記』では剪により作られる。
- VI. 紙銭の紙質は白い良質な紙が好まれた。
- VII. 当時の現世での支払い手段であった金銭糸絹のうち、金・絹であれば実物であっても冥府で通用したが、それ以上に錫や紙で作った代用品の方が好まれた。

永尾竜造1927『支那の民俗』^(註30)は紙銭の使用をA. 旅費として焼く場合、B. 魔除けとして投げる場合、C. 地獄での費用として送金する場合の3つに分類している。余欣2012は新疆吐魯番から出土する紙銭の使用法を示し、a. 瘞埋(埋める)、b. 焚火、c. 墓地に掛ける、d. 虚空に撒くとしている。

この両者の分類に従い、唐代文献中の紙銭について見ていくと、まず『冥報記』における紙銭は、主に永尾分類のAに該当する。現世と冥府の間において道案内の使者たちへの賄賂として紙銭が使われている例が多い。また、上記IVの現世と冥府の行き来と共に紙銭が銅銭に、銅銭が紙銭へと変化する状況は永尾分類Cに該当する。永尾分類Bについては『冥報記』には見られないが、余欣2012は王梵志の詩中の紙銭について現在の葬儀の際の路銭（辻などに溜まる無縁霊などを懐柔し、葬儀の邪魔をさせないために撒く紙銭）と近似するものと捉えている。

以上が唐代の文献と詩や小説の中に見える紙銭であるが、おおよそ同時期の実物資料として、新疆吐魯番地区出土の紙製明器群の中の紙銭について次節で見ていくことにする。

(3) 新疆吐魯番出土の紙製明器群の中の紙銭について

新疆吐魯番地区の古墓から紙製明器が出土することは、オーレル・スタイン（1862～1943）が第3次中央アジア調査の折に行った阿斯塔那古墓群の発掘により、古くから知られている。この調査では紙銭・紙靴・紙帽などが発見されたとされる^(註31)。

オーレル・スタインによる調査以降も、新疆吐魯番地区からの紙製明器の出土は継続的に伝えられている。管見の限り、発掘報告がなされているものを挙げると表1ようになる。これ以外にも、余欣2012は未発表の資料として吐魯番木納尔墓地出土の紙銭2点（2004TMM102：47a、47c）を紹介している。

さて、紙製明器を見ていく前に、まずは「明器」について簡単に触れておく。一般的に死者を埋葬する際に、死者と共に棺内、もしくは墓内にさまざまな物品を埋納する。埋納する物品は、死者が生前使っていたものであったり、死後の世界で使用するために誂えたものであったりする。この、死後の世界で使用するため、つまりは埋納するために特別に制作された器物を「明器（冥器）」と呼ぶ。一般的な明器は、生前の実用性を失ったもので、漢代から唐代においては人物や動物、家屋・灶・厠のミニチュアなどが墓内に埋納される。

新疆吐魯番地区から出土する紙製明器とは、本来は異なる素材で制作される物品について素材を紙に代えたもので、対象となる器種は日用品が多い。日用品の中では服飾に関する物品が主であり、紙帽、紙靴が特に多く、その他では紙冠、紙腰帯があり、これらはみな被葬者が身に着けた状態で出土する。少数ではあるが、吐魯番阿斯塔那古墓群M506の紙棺やM509出土の紙衾といった事例も見られる。また、これらの紙製明器の材料となる紙は、廃棄された公用文書が使用されている。

それでは、なぜ紙で明器が作られたのか。その理由について、陸錫興2006「吐魯番古墓葬紙明器研究」^(註32)は物資の乏しい吐魯番地区は生活も苦しく、明器の素材も土や木、紙など質素なものが選択されたとしている。また、孫麗萍2014「吐魯番古墓葬紙明器考論」^(註33)は紙が廉価で求めやすかったため素材となったとしつつも、一方で阿斯塔那古墓

表1 新疆吐魯番地区阿斯塔那古墓群出土紙製明器一覽

墓NO.	年代	出土遺物	出土状況	報告書	雑誌名	刊・号	備考
TAM37	盛唐～中唐	藤盒、漆盤、蒲靴、麻靴、綿靴下、紙帽、鷄鳴枕、泥豆、泥壺、紙腰帶、綿單、紙錢、褐衣、棍、文書	左被葬者の腰部から紙腰帶、頭部付近から紙人が出土。紙錢2点は前室から出土	新疆吐魯番阿斯塔那哈拉和卓古墓群発掘簡報	文物	1973-10	同時期の墓より紙冠が出土。紙銭の形状は不明。
TAM301	十六国～盛唐 (643年文書)	紙靴		新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	麻紙を側面と底面に分けて切り離し、糸で繋ぎ合わせている。
TAM302	十六国～盛唐 (653年文書)	紙靴	女性墓。足にははかせた状態で出土。	新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	2体の女性遺体の口内にはペルシャ銀貨あり。
TAM303	十六国～盛唐 (551年文書)	剪紙1点（土黄色紙－円形凶案）		新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	305号墓から五銖銭4点、304号墓から泥銭30余点出土
TAM306	十六国～盛唐 (541年文書)	剪紙2点（藍色紙－円形凶案と土黄色紙－六角形凶案）		新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	
TAM360	開元年間	紙靴		新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	
TAM363	十六国～盛唐 (541年文書)	紙靴1点		新疆吐魯番阿斯塔那北区墓群発掘簡報	文物	1960-6	紙筒と底を死者に履かせた後縫合している。
TAM382	南北朝時代	紙靴1点	被葬者が身に着けた状態で出土。	1986年新疆吐魯番阿斯塔那古墓群発掘簡報	考古	1992-2	
TAM384	高昌時期	紙帽1点、紙靴2点、樹枝、葡萄藤、葦を編んだ席	被葬者が身に着けた状態で出土。	1986年新疆吐魯番阿斯塔那古墓群発掘簡報	考古	1992-2	樹枝などを藜具とした簡便な棺に入られている。
TAM386	高昌時期	紙帽1点、紙靴4点、墓誌、碗・豆・罐・木鴨・木棍・麻布・麻靴・枕・葦を編んだ席など	被葬者が身に着けた状態で出土。	1986年新疆吐魯番阿斯塔那古墓群発掘簡報	考古	1992-2	2体の被葬者は両足に紙靴を身に着け、うち1体は紙帽を被っていた。
TAM387	高昌時期	紙帽、紙靴	被葬者が身に着けた状態で出土。	1986年新疆吐魯番阿斯塔那古墓群発掘簡報	考古	1992-2	
TAM389	西州時期	紙帽、紙靴	被葬者が身に着けた状態で出土。	1986年新疆吐魯番阿斯塔那古墓群発掘簡報	考古	1992-2	
TAM506	唐大歴4（769）年	紙棺		1973年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報	文物	1975-7	
TAM509	唐大歴4（769）年	紙衾	大量の文書が出土	1973年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報	文物	1975-7	
TAM521	南北朝時代中期～中唐 (Ⅱ～Ⅲ期)	麻布、繩、紙銭	被葬者はすでに「空墓」とされる	1973年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報	文物	1975-7	519号墓（貞觀16（642）年）からは高昌吉利銭が出土

群の発掘担当者の視点として、その他の副葬品や被葬者の身分などを勘案すると必ずしも経済的な理由から紙製明器を作ったとは思えないとする見解を紹介している。実際に表1のTAM386の出土遺物を見ると、麻靴が出土しているにも関わらず、被葬者2体の足には紙靴が履かされている。先に挙げた『冥報記』陸仁菑の説話では、冥界では金・絹は実物であっても通用するが、それ以上に錫や紙で作った代用品の方が好まれていたことと考え合わせると、紙製明器には生前に使われていた実用品とは異なる素材で死後の生活用品を作ることに意味があったと推測することができる。

次に、紙銭の出土事例は4事例6点確認されている。新疆吐魯番阿斯塔那-哈拉和卓古墓群TAM37は唯一出土状況が確認できる事例で、被葬者のうち1体は紙腰帯を身に着け、頭部付近には紙人が置かれている。一方で、紙銭は被葬者から離れた前室内から出土している。TAM521はすでに被葬者が改葬された後の空墓から紙銭が出土した事例である。

表1に示した事例以外では、前掲のオーレル・スタインの調査で発見された1点と余欣2012で紹介されている吐魯番木納尔墓地出土の紙銭2点（2004TMM102:47a、47c）がある。2004TMM102:47aは6枚の銭形が連なった形状をしており、銭形の寸法は直径3.7cm、全体の寸法は14.8×17.4cmという。2004TMM102:47cは4枚の銭形が連なった形状で、銭形の寸法は直径3.7cm、全体の寸法は14×11.1cmという。図面がないため、詳細な形状の把握は困難であるが、寸法から推測すればそれぞれ銭形が2×3、2×2で配置された形状であろう。また、オーレル・スタインの1点（AST. iii. 4. 04）は折り重ねた後に加工したもので、全体寸法は約37.5×7.5cm、すでに円形方孔の銭形に加工されたものが1串半、約20枚が残存していたという。この紙銭は紙の辺縁と繋がっており、辺縁右下にはすでに切り取られた他の1串の痕跡が残る。余欣2012は上記3点の紙銭に就いて制作途中の未成品と捉えている。

以上のように新疆吐魯番地区では、南北朝時代から中唐にかけて、紙製明器の出土が確認できる。紙製明器の主となるものは、紙帽、紙靴を中心とした日常の装身具であった。これら紙製明器が出土する墓では、実用の麻靴などが出土したとしても、被葬者が直接身に着けているのは紙製の非実用品の方である。この状況からは生者と死者には身に着けるべき着衣が異なり、紙製明器とは死者のための着衣であったと考えることができる。

この紙製明器の中で、紙銭の出土状況は少々異なる。出土状況が明らかな事例が1例のみであることから軽々に推論を述べることは避けるが、唯一の出土例であるTAM37では紙銭は被葬者の周辺ではなく、前室において出土している。これは、何らかの葬送儀礼の中で使用されたような印象を持つが、詳細は今後の発見・報告事例の増加を待たねばならない。

(4) まとめ

本章では、1節で紙銭の出現時期に関する諸説を紹介し、2節・3節は唐代の紙銭について紹介した。2節は唐代の詩と小説の中に登場する紙銭について、3節では実物資料としての紙銭を求め、新疆吐魯番地区から出土する紙製明器と共に紙銭を取り上げた。

紙銭の出現時期については未だ決め手がないが、遅くとも唐・玄宗皇帝の時期には宮中で祭祀が行われるまでに盛行していたのは確かであり、それに先立つ南北朝時代から盛唐時期の新疆吐魯番地区では少数ではあるが、すでに紙銭の出土が確認されている。新疆吐魯番地区の紙銭は、死者の着衣として埋葬用に作られる紙製明器の一種として捉えるべきであるが、出土状況から見ると紙銭は被葬者周辺からは出土しておらず死者の持ち物ではなく墓内祭祀等で使用されたようでもあるが、出土状況が分かるものが1例であり今後の事例の増加が待たれる。

唐代の詩と小説に登場する紙銭は、焼くことにより冥府に送り、冥府の財貨となすという点で現代の紙銭と同様の機能をすでに持っており、冥府の側では紙銭の量や紙質に対して嗜好があったことが分かる。一方で、紙銭を焼き冥府に送ると、冥府では銅銭に転じ、再び現世に持ち込むと紙銭に戻るといふ説話も存在している。『冥報記』の李山龍や王璿の説話の中では、紙銭は冥府から主人公を救い出すための賄賂として現世と冥府を仲介する道案内役である使者（鬼）に送られる。仏教の施餓鬼会の起源について、目連上人が地獄（餓鬼道）で苦しむ母を救済する術をお釈迦様に尋ねたところ、母を救うのではなく仏僧に布施をすればその功德により母も救われると教えを受けたとされるが、救済したい

対象に財貨を送るのではなく第3者に送ることにより結果的に救済したい対象を救うという構成は『冥報記』の説話と通ずるものがある。加えて、紙銭を焼いて送るという行為と仏教の荼毘との関係を指摘する研究者も多い^(註34)。

紙銭と仏教との関わりと同様に紙銭と道教の関わりも重要である。そもそも唐は遠祖を老子に求める王朝であり、その唐において宮中で用いられるに至った紙銭は道教と無関係ではないであろう。紙銭の出現期に関する議論の中で紹介した殷仲堪は天師道の信奉者であり、南齊の東昏侯も鬼神を使うことを好んだとされる。これらの人物が紙銭の始まりとして名前が挙げられるのは、紙銭の開始と道教とを結びつけた結果である。陳啓新1996は、唐代に宮中で紙銭が使用されるようになる前提として、それ以前からの民間での紙銭習俗の流行があったとし、その担い手として巫覡の存在を指摘している。この巫覡たちの活動により、寒食や清明、中元などの節日以外にも紙銭を使用するようになったのも唐・宋の時代だとしている。

以上のように見てくると、唐代にはおおよそ現代と変わらない紙銭の習俗が完成していたようである。それでは同時期の瘞銭とはどのようなものであったのか。次章では、考古発掘によって得られた出土銭貨から、唐代の瘞銭を復元していくこととする。

2. 唐代の瘞銭について

前章において、すでに触れたところであるが、紙銭の源流は中国古代より行われてきた瘞銭だとされる。紙銭が登場する最初の文献史料である唐・封演（726～790？）『封氏見聞記』には「按、古者享祀鬼神有圭璧幣帛、事卒則埋之、後代既宝銭貨、遂以銭送死。『漢書』称“盗発孝文園瘞銭”是也。」とあり、死者を弔うための埋納物は、圭璧幣帛から銭貨、更には紙銭へと変化したものと信じられてきた。

しかし、紙銭が確実に出現している唐代以降においても、中国の墓の埋納物の中から銭貨が消えることはない。そうして見ると、瘞銭という習俗が紙銭に取って代わられたというわけではなく、瘞銭の機能の一部が紙銭に変化したと捉える方が妥当であろう。本章においては、唐代の瘞銭について出土銭貨の集成からその傾向を論じ、前章において取り上げた唐代の紙銭との比較を通じて、唐代の瘞銭と紙銭の関係性について明らかにしていきたいと思う。

(1) 中国漢代の瘞銭について

瘞銭とは、銭貨を墓に埋納する行為をいう。先述の『封氏見聞記』の引く『漢書』巻59「張湯伝」の記事に魏・如淳が註して「瘞は埋也。銭を園陵に埋めて以て死を送る也。」とあり、副葬品の一つとして墓に銭を埋納する行為、もしくは埋められる銭そのものが瘞銭とされる。まずは、紙銭の源流とされる漢代の瘞銭から見ていくこととする。

中国における瘞銭は、金属貨幣の出現とほぼ同時期からみられる。最初の金属貨幣とされる空首布は春秋戦国時代の洛陽周辺の晋墓から出土することが知られている。戦国時代晩期になると、瘞銭は各地に広がりを見せ、趙・齊・燕などの中原地域、戦国秦の地であった甘肅・四川地域、楚地であった湖北・湖南・河南・安徽・山東・江蘇省などからの出土が確認される。この戦国時代において、注目すべき事柄として、埋納用に作られる非実用貨幣である「冥幣」^(註35)がすでに見られることである。南方の楚国では、銅製の蟻鼻銭や金貨幣である郢冨金が主に流通していたが、墓内からはこれらの貨幣を土製で模した冥（明）幣が出土している。

前漢代になると、貨幣経済の発展と共に、瘞銭の習俗も広がりを見せる。すでに3万基以上が調査されたともいわれる漢墓のうち、多くの墓から銭貨の出土が確認されている。解放後間もなく発掘調査が行われた洛陽燒溝漢墓^(註36)では、200基の墓のうち162基から銭貨が出土している。これらは主に中小型墓であり、瘞銭の習俗は漢代には一般にまで広まっていたことを示している。

それでは、銭貨はどのように墓に埋納されるのか。筆者はかつて拙稿「漢代墓葬出土銭の研究」（以下佐藤2014）^(註37)の中で、漢代の政治の中心であった西安・洛陽周辺の漢墓における出土銭貨の集成を行った。この中で、各墓の出土銭貨の点数と出土状況について纏めている。まず、点数であるが、表2は佐藤2014で示した各地域の墓1基あ

たりの出土点数を集計したものである^(註38)。これを見ると、各墓から出土する銭貨の点数は、1～10点と11～50点、つまり50点以下のものが全体の70%を占めている。また、500点以下まで含めると全体の95%にのぼり1,000点を超える事例は僅か4例のみで割合としては1%に満たない。

次に銭貨の出土状況である。表3～5は西安周辺の漢墓における銭貨出土位置を集計したものである^(註39)。表3は墓内の出土位置を示したもので全体の約90%が墓室内（前室、後室）から出土している。表4は墓室内の出土位置を示したものであるが、棺内から出土するものが全体の70%近くを占める。発掘調査時にすでに棺が朽ち果て位置が不明のもので墓室内にカウントされているものもあると推測され、実際には棺内の割合はもう少し高いと考えられる。

表2 漢代洛陽・西安周辺各墓の出土銭貨点数

地域／点数	1～10	11～50	51～100	101～500	501～1000	1001～	地域ごと計
洛陽焼溝漢墓	52	69	17	23	1	2	164
洛陽周辺（除く焼溝漢墓）	4	12	2	11	2	0	31
河南省（除く洛陽）	56	50	21	21	5	2	155
西安周辺	67	122	34	29	5	0	257
計	179	253	74	84	13	4	607
割合	29.5%	41.7%	12.2%	13.8%	2.1%	0.7%	100%

表3 漢代西安周辺墓の銭貨出土位置①

	墓道	前室	後室	耳室	側室	辺箱	小龕	計
0期	1	15				2	1	19
1期		2						2
1～2期		14						14
2期		4						4
2～3期		16			1			17
3期前		42						42
3期後		28						28
4期		4			1			5
4～5期		1	1					2
5期		34	17	2	9	3		65
6期		29	10		1	2		42
計	1	189	28	2	12	7	1	240
割合	0.4%	78.8%	11.7%	0.8%	5.0%	2.9%	0.4%	100%

※0期 - 前漢前期、1・2期 - 前漢中期及びその後、3期前半 - 前漢後期、3期後半 - 新及びその後
4期 - 後漢前期、5期 - 後漢中期、6期 - 後漢後期

表4 漢代西安周辺墓の銭貨出土位置②

	棺内	棺周辺棺外	墓室内	墓室外	計
0期	10	6	2	5	23
1期	3				3
1～2期	13	1			14
2期	4	1	2		7
2～3期	15		1		16
3期前	32	1	5		38
3期後	24		3		27
4期	4		1		5
4～5期	1		1		2
5期	32	5	21	2	60
6期	18	3	13		34
計	156	17	49	7	229
割合	68.1%	7.4%	21.4%	3.1%	100%

表5 漢代西安周辺墓の銭貨出土位置③

	頭部	胸部	腕部	腰部	脚部	散在	容器内	計
0期	1	1		3				5
1期		1			1			2
1～2期		3		9				12
2期		3		1				4
3期前	8	9	4	16	3	1		41
3期後	4	2	5	13	3			27
4期	1	1		1		1		4
5期	6	4	1	7	2	6	2	28
6期	3	1		4	4	2		14
計	23	25	10	54	13	10	2	137
割合	16.8%	18.2%	7.3%	39.4%	9.5%	7.3%	1.5%	100%

表5は被葬者のどの位置から銭貨が出土したかを集計したものである。腰部からの出土が最も多く、これは銭貨に紐を通し腰に佩びた装束で葬られたためと見られる。ただし、腰部付近からの出土は手に持たせていたものの可能性もある。また、胸部、腕部など被葬者の身上や脚の間から出土するものもある。その他では、頭部付近に置かれたものも多い。出土位置については、前漢中期までは胸部、腰部付近からの出土が多く、前漢後期以降になるとさまざまな位置から出土ようになる。これは、もともとは被葬者に身に着けさせた状態で埋納していた銭貨を、前漢後期以降ではそれ以外の方法・理由により埋納するケースが現れたことを示している。漢代以前における銭貨の出土事例として河北省易県武陽台燕下都戦国墓からは22体の被葬者と共に1,300点以上の金属貨幣が出土し、多くは被葬者の腰部に佩びた状態であった。これは当時の兵士が戦場に出る際の装束・スタイルであったと推測され、前漢中期以前の瘞銭は生前の姿のまま銭貨を所持させて、被葬者を冥府へと送り出したとみられる。

以上が漢墓における銭貨の出土状況である。これらの状況を纏めると、銭貨は50点以下の単位で被葬者が身に着けた状態で埋納されることが一般的であったと推測することができる。これは日常生活の中で所持する銭貨の数量であり、スタイルであったとみられる。それでは、漢代において潜在的に存在する銭貨の数量の中で、墓からの出土銭の数量はどのように位置づけられるのか。筆者は拙稿「東アジアの中の貨泉」（以下佐藤2015）^(註40)において漢代の窖藏銭^(註41)の集成を行った。前掲の瘞銭と比較すると、個々の窖藏銭の出土点数はきわめて大量といえる。例えば、新代では寧夏自治区塩池張家場窖藏、陝西省靖辺楊橋畔竜眼窖藏、同安康忠義窖藏、同清澗県招待所窖藏、同大荔東羌白窖藏、河南省靈宝窖藏など10,000点を超える窖藏が確認されている。後漢時代の窖藏は新代よりも更に点数は多く、陝西省安康中渡台窖藏、甘肅省徽県農機学校窖藏、広東省清遠高中窖藏、江西省横峰何家村窖藏、同安遠湾里窖藏、湖南省祁陽広福窖藏は10,000点を超える事例であり、山西省侯馬西張寨窖藏は90,000点以上の銭貨が出土している^(註42)。

これらの比較からも、漢代の瘞銭には大量の銭貨の埋納を要してはなかったと推測しうる。瘞銭は被葬者の装身具の一部として、冥府での生活費であったり、あるいはそこにたどり着くまでの路賃であったり、通常持ち運ぶことができる数量であったのだろう。

漢代に続く魏晋南北朝時代の瘞銭について、出土銭貨に関する全国的な集成は未だなされていない。ただし、副葬品全体に関していえば三国・魏の時代は一つの画期とされている。

一般的に魏晋南北朝時代は中国の歴史上において薄葬の時代とされる。三国時代・魏の曹操は厚葬と碑を建てることを禁じ、その息子曹丕も薄葬を魏国の国策とし、西晋に至るまで薄葬の風は一定程度受け継がれていく。この曹操・曹丕による薄葬の理由として、戦乱の中で社会は経済的な困窮にあり、その中で厚葬を行うことは人々を盗墓（墓を暴く）に向かわせるということが第1にあったと考えられる。曹操は封土や植樹など墳墓における地上の標示物を禁止し墓の目印を失くし、また金玉珍宝の埋納を禁じ、盗墓行為を行う理由自体を失くそうとした。王建宏2009「魏晋薄葬形成的原因考述」^(註43)、蔡明倫2002「魏晋薄葬原因探析」^(註44)はこの他に、仏教や玄学、道教及び少数民族の文化が流入した

後漢末から魏晋南北朝時代の習俗の変化を理由に挙げている。

この薄葬の風が瘞銭にどのように影響を与えたかは、未だ不明であるが、管見の限りで言えば魏晋南北朝における瘞銭の出土点数は総じて減少傾向にあるように見える。出土点数の多くが50点以下に集中する状況は漢代と同様であるが、100点以上が出土した墓は魏晋代では甘肅省安西早湖塼墓地（五銖銭ほか277点）、陝西省安康西晋墓（五銖銭200余点）、北京市石景山区八角村魏晋墓（五銖銭など200余点）、河南省洛陽谷水晋墓M4（五銖銭など約3400点）、同M5（五銖銭104点）、河南省高県果酒厂晋墓（五銖銭など200点）、河南省洛陽衡山路西晋墓（五銖銭など約150点）、洛陽澗河東岸座西晋墓M8632（五銖銭119点）、江西省南昌市高栄墓（後漢五銖銭など644点）、湖北省大冶河口鎮六朝早期墓（五銖銭など200余点）、湖北省老河口市李楼西晋紀年墓（五銖銭106点）、湖南益陽羊午嶺東晋墓（銅銭1150点）、浙江省安吉三官西晋墓（五銖銭など253点）、浙江省紹興官山西晋墓（銅銭100余点）、浙江金華古方東晋墓（五銖銭など100余点）、新疆敦煌新店台西晋墓（貨泉など1,430点）、安徽省合肥三里街西晋墓（3基で1,005点）、安徽馬鞍山桃冲西晋墓（銅銭200余点）などがある。南北朝時代では陝西省咸陽平陵十六国墓（五銖銭など129点）、甘肅武威煤礦機械廠東晋十六国墓（銅銭100点）、南京隱竜山南朝墓（五銖銭など431点）、湖北秭師石門嘴遺址（五銖銭など259点）、湖北均県呂家南朝墓（五銖銭など2基で約2007点）、江蘇省邗江高小南梁墓M2（銅銭105点）、江西南昌徐家坊南朝墓（後漢晩期五銖銭約300点）、広西省梧州豊民坊南朝墓（五銖銭130点）などがある^(註45)。

以上が春秋戦国時代から漢代、魏晋南北朝時代の瘞銭の出土状況である。漢代までの厚葬の風から魏晋南北朝時代の薄葬の風へと変化しても、各墓に埋納される銭貨の出土点数には大きな違いはないようにも見える。これは、銭貨の埋納が被葬者の装身具の一部、もしくは被葬者の所持品の一つであり、そもそも厚葬と薄葬の別による影響を受けるほどの数量ではなかったことに由来すると考えられる。

本稿で主題としている唐代の瘞銭については次節で触れていくが、魏晋南北朝時代に続く隋唐時代は厚葬の風が戻る時代でもある。厚葬の風の中で、唐代の瘞銭がそれ以前とどのように異なり、またこの時期から使用が盛んになる紙銭とどのような関係性をもつのであろうか。

(2) 唐代の瘞銭について

唐代（618～907年）は中国ないしは東アジアの貨幣史の中で極めて重要な時期である。それは「開元通宝の誕生」という一語に集約される。開元通宝は年号を銭文に持つ最初の銭貨（年号銭）であり、それまでの半両銭や五銖銭が金属の重量を銭文としたのとは異なる。この「年号+通宝、元宝」という銭文のスタイルは、基本的には19世紀まで東アジアの銭貨の基礎となった。

開元通宝は、貨幣史上重要な銭貨ではあるが、その鑄造量は前漢代とさほど変わらぬ水準であり、天宝年間（742～755年）の鑄造量は年3.2億枚とされる^(註46)。最大で年50億枚以上の鑄造量を誇る北宋代と比較するとやや見劣りする数量である。

それでは唐代の瘞銭について各墓の出土点数と出土状況を纏めていく。まず、出土点数を示したのが表6である。漢代に比べると総じて出土点数は少なく、10点以下の割合が高く74%、50点以下の割合は全体の92%になる。更に言えば、1,000点以上の事例も今のところ確認できていない。

次に出土位置について、示したものが表7である。棺内からの出土が60%以上、墓室内には棺が朽ち、被葬者の位置が不明なものも多いため、実際には棺内の割合はさらに高いと推測される。棺周辺棺外としたものには、表8で示す棺の上や棺床に銭貨を置いたものうち棺が朽ちた際に周辺に散らばったものも含むと見られる。墓室外の事例としては、河南省鄭州市上街唐墓では墓道からの出土、四川省成都市金沙村唐墓（M1）では棺床の他に甬道から銭貨が出土している。遼寧省塩池蘇歩井唐墓（M5）では墓道と耳室の覆土内、陝西省西安王家坟唐墓では甬道、墓道の覆土中よりそれぞれ出土しているが、これらの銭貨の原位置は不明である。河南省唐安国相崔氏墓（M50）では2つの壁龕から銭貨が出土しているが、これらは銅製の開元通宝ではなく粘土製の冥銭である。

表6 唐墓からの銭貨出土点数

点数	事例数	%
1～10	157	74.4%
11～50	37	17.5%
51～100	9	4.3%
101～500	8	3.8%

表7 唐墓における銭貨出土位置①

出土位置	事例数	%
棺内	75	61.5%
棺周辺棺外	7	5.7%
墓室内	35	28.7%
墓室外	5	4.1%

表8 唐墓における銭貨出土位置②

出土位置	事例数	%
頭	13	22.0%
胸	4	6.8%
腕	0	0.0%
腰	17	28.8%
脚	6	10.2%
散在	1	1.7%
口中	5	8.5%
棺上、棺床	13	22.0%

表8は被葬者周辺から出土した銭貨の位置である。腰部付近からの出土が多いのは漢代西安周辺の事例と同様であるが、胸部付近からの出土が少なく頭部付近からの出土が多くなっている。この傾向から、漢代に多く見られた被葬者が手に握る、もしくは身に着けるような所持という概念が弱まり、棺内の呪的な埋納物としての性格が強まるように見える。

少数の事例として、口中に銭貨を入れる事例が確認されている。表8のカウントの中では1事例のみであるが、魏晋南北朝時代から新疆吐魯番地区では口中に波斯（バルシャ）の金・銀貨を入れた事例が複数確認されている^(註47)。同時期の新疆吐魯番地区では木製の冥幣により目を塞ぐ事例もあり、外部の邪気が被葬者の体内に侵入しないように体の穴を塞ぐという共通の目的を見て取ることができる^(註48)。

前掲の漢代と唐代で大きく異なるのは、棺上や棺床からの出土の割合が高くなっている点である。これについては、唐代の紙銭の埋納とも関係する問題であるため、後述する。

唐代の瘞銭の状況を纏めると、墓1基ごとの銭貨出土点数は漢代、もしくは魏晋南北朝時代と比較して少なくなっている。出土状況としては、おおよそ墓室内、棺内から出土し、棺内での出土位置については被葬者の手、腰部付近からの割合が減少し頭部付近や棺蓋の上や棺床に銭貨を置くものが多くなっている。この出土状況について、筆者は漢代では生前の被葬者の姿を再現した際に所持品として銭貨が埋納されることが多かったものが、唐代では棺内の呪的な埋納物としての性格が強まったと捉えている。唐代は魏晋南北朝時代の薄葬から厚葬へと変化する時期であり、更に銭貨の埋納に所持品としての意味合いに加えて、呪的な意味合いが強まるとすれば、本来は銭貨の出土点数は増加するはずである。それに関わらず、出土点数が減少する状況をどのように捉えるか。筆者はこの状況にこそ瘞銭の中の紙銭の影響を想定しているのである。

瘞銭と紙銭の関係に言及する前に、棺上や棺床から出土する銭貨について、触れておくことにする。劉1981「中国の死喪儀礼における死葬観」^(註49)は、現在の河北省定県の事例として、納棺前に、喪主が棺内に大量の紙銭と銅貨（ママ）を撒き散らし墊背銭（背中に当てるお金）とする習俗を紹介している。これは棺底の湿気取りという実用的な理由と共に、棺内の辟邪や死者を地の穢れから隔離するなどの宗教的な目的を有するようである。また、満州でも棺底に銭貨を撒く習俗があるという。表8で示した唐代の出土銭貨において、棺床から出土するものについては墊背銭である可能性が高いと考えている。一方、棺蓋の上に置いているものについては今後の検討を要する。

劉1981の中でもう1点注目しておきたいのは、台湾では納棺の際、棺内に入れるさまざまな物品の第一として、蓮草や紙銭、庫銭と共に灰を入れる点である。この灰は植物を燃やしたもので棺内の湿気取りを目的に入れられるものと目されるが、明代の墓からは湿気取りではない灰の埋納事例を見出すことができる。明益宣王妃季英姑墓^(註50)の棺蓋上には葛袋が1つ置かれており、その中には路引と紙銭を焼いた後に残る紙銭灰が入れられていた。湖北省武穴張懋

墓^(註51)の被葬者は銭袋を握った状態で発見され、銭袋には紙銭はなく紙に包まれた紙銭灰が入れられていた。これらの事例では、墓内に紙銭灰を入れる目的が単なる棺内の湿気取りでないことは明らかであり、特に武穴張懋墓の出土状況は被葬者に銭貨を持たせる際の様子と似通っている。先に挙げた『冥報記』の中で、現世で焼いた紙銭があので銭貨に変化する説話を取り上げたが、上記2例の紙銭灰は被葬者があので着く頃には銭貨へと変化しているはずである。つまり、現世での紙銭灰＝あのでの銅銭という図式が成り立つと考えられるのである。

一方で、この紙銭灰が墓内に埋納されたとしても、発掘調査の際に確認することは困難である。前掲の明代の2事例は、袋に入れられた状態であったため、その存在が確認された。しかし、例えば遼寧省固原羊坊唐墓では棺床の白灰層の上に銭貨が敷き詰められ出土している。この白灰層に紙銭灰が含まれていたとしても、科学的な成分分析をしなければ気づくことは不可能であろう。

つまり、考古発掘によって得られる紙銭が乏しい理由として、紙銭の原材料である紙の耐久性の低さを挙げることはできるが、そもそも紙銭は紙銭の状態で埋納されたのか、という点を考えてみる必要がある。葬送儀礼の中で紙銭が使用されたとしても、墓前祭祀により墓の外で燃やす、もしくは上記の事例のように紙銭灰の状態で埋納されていれば、考古学的にその存在を認識することはきわめて困難と言える。

ただし、直接的な認識は困難であるが、状況からの類推は不可能ではないと筆者は考えている。つまり、唐代の厚葬の風の中で、銭貨の墓1基あたりの出土点数が減少している状況は、瘞銭の中の機能の一部を紙銭が代替したことの証左となると考えている。それでは、紙銭が代替した瘞銭の機能の一部とは何か。それは本節で指摘した唐代の瘞銭における、所持品として埋納される銭貨の割合の減少が答えとなると考えている。つまり、紙銭の出現以前の瘞銭においては、被葬者は常に現世から銭貨を所持した状態で冥府へと旅立つ必要があった。しかし、現世で焼けば冥府で銭貨に変化する紙銭が登場すると、被葬者は銭貨を所持せず、冥府へ旅立つことができるようになった。現世から冥府への遠隔地送金システムとしての紙銭の広まりこそが、唐代の厚葬の風の中で銭貨の出土点数を減少させ、瘞銭の中で被葬者の所持品としての銭貨の埋納の意識をも減少させる要因となったのである。

(3) まとめ

本章では、唐代の瘞銭を明らかにするため、まずは春秋戦国時代以降の中国における瘞銭の歴史を纏め、本題である唐代へと論を進めた。特に佐藤2014において集成を行った漢代の洛陽・西安周辺における瘞銭との比較から唐代の瘞銭の状況を明らかにした。唐代の瘞銭の特徴は2点で、①漢代・魏晉南北朝時代に比べて出土点数が減少している、②漢代の瘞銭は冥府へ向かう被葬者に銭貨を所持させる意識が高いが、唐代ではその意識が弱まっている、という2点を指摘した。

この原因について、筆者は現世からあのでの遠隔地送金システムとしての紙銭の広まりが、唐代の厚葬の風の中で瘞銭の出土点数を減少させ、被葬者の所持品としての銭貨の埋納の意識をも減少させたと結論付けた。

本章における論証には欠陥が存在することは認識しているが、特に大きな欠陥として、漢代と唐代の間に入る魏晉南北朝時代の瘞銭の全国集成を行っていない点が挙げられる。瘞銭を有する遺跡の情報収集と出土点数については、おおよそ集成を行っているが、出土状況については未整理のままである。この魏晉南北朝時代の瘞銭の集成については別稿を期すこととしたい。不完全な本章ではあるが、瘞銭の出土点数・出土状況の変化と紙銭の出現・広まりを関連付けた点については、一定の意義があると考えられる。今後、魏晉南北朝時代の集成を行う中で紙銭がいつ、どこから出現し、どう広まっていったのか推測しうるものと考えている。

3. おわりに－まとめにかえて－

本稿の目的は、紙銭とその源流である瘞銭の比較を、唐代を対象として行うことであった。唐代は文献史料や詩・小説、考古発掘による出土資料においても紙銭の現存が確認できる最古の時期である。

唐・封演『封氏見聞記』は、紙銭の源流について、古代における圭璧幣帛の墓への副葬が後に銭貨へと変わり、後漢代に紙が開発されると銭貨の代用品として紙銭が用いられるようになったとする。この紙銭の源流とされる銭貨を墓に副葬する行為が瘞銭である。ただし、瘞銭は紙銭の出現以降もそれまで同様に続いていくことを認識しておかなければならない。これは紙銭が瘞銭に取って代わるという話ではなく、瘞銭の機能の一部を紙銭が代替したというものである。それでは紙銭が代替した瘞銭の機能とは何か、それを探ることが本稿の目的の一つであった。

まず、第1章では唐代の紙銭について、その様相を文献史料と詩や小説から追っていった。紙銭の出現期については諸説があるが、少なくとも唐・玄宗の開元年間には宮中での祭祀に紙銭が使用されており、その背景にはそれ以前からの民間での紙銭習俗の盛行があったと見られる。唐詩の題材として現れる紙銭は、主に火の使用を禁じられた寒食節における墓参りの情景の一部として現れる。王建『寒食行』の「三日無火焼紙銭、紙銭那得到黄泉？」は火の使えない寒食節に紙銭が黄泉に届くかを詠んだもので、本来紙銭は焼いて黄泉に送るものであるという認識を逆説的に示している。また、『冥報記』をはじめとする唐代の小説の中にも紙銭は多く登場する。仏教説話の中に登場する紙銭は、一度死に冥府へと連れて行かれた主人公が、現世への帰還を許された帰路に道案内役の使者（鬼）へ渡す賄賂として登場する。主人公は現世にいる家人に紙銭を焼き送るように頼むか、一度現世に戻った後紙銭を焼き、使者に送っている。つまり、唐代の紙銭には、火で焼くことにより冥府に送り、冥府の財貨となるという現在と同様の機能がすでに備わっていたと見ることができるが、一方で送る相手は直接救いたいと願う相手ではなく、使者（鬼）である点において仏教の施餓鬼会との関係性も考慮すべきであろう。また、紙銭を焼き冥府に送ると、冥府では銅銭に転じ、また現世に持ち込むと紙銭に戻るという説話も存在し、現世と冥府の遠隔地送金システムとしての紙銭の機能も認識しておくべきである。

唐代における紙銭の実資料は、南北朝時代から中唐にかけての新疆吐魯番地区から出土する紙製明器の一つとして確認されている。同地の紙製明器は紙帽、紙靴を中心とした日常の装身具を主とし、墓内から被葬者が身に着けた状態で出土する。阿斯塔那-哈拉和卓古墓群TAM37は唯一紙銭の出土状況が確認できる事例で、被葬者のうち1体は紙腰帯を身に着け、頭部付近には紙人が置かれている一方で、紙銭は被葬者から離れた前室内から出土している。この当時の紙銭は、紙を折り重ね、円形の銭型を連ねた形状に切り出したものであったと見られる。但し、出土事例については未成品とする見解もあり、正確な形状の把握には更なる事例数の増加が必要となる。また、同地で紙製明器が使用された背景について物資の乏しさを理由とする見解もあるが、紙靴が出土する墓内から実用の布靴が出土する事例もあり、『冥報記』陸仁蒨の説話にある、冥界では金・絹の実物よりも錫や紙で作った代用品の方が好まれていたことと考え合わせ、非実用品であることに意味があったと理解するべきであろう。

第2章においては、唐代の瘞銭について全国的な集成を行い、主に漢代の墓からの出土銭との比較を行った。集成の結果として、唐代の瘞銭には①漢代・魏晋南北朝時代に比べて墓1基ごとの出土点数が減少している、②漢代の瘞銭はあの世へ向かう被葬者に銭貨を所持させる意識が高いが、唐代ではその意識が弱まっている、という2点の特徴を指摘した。この2点の特徴の背景には、唐代に盛行した紙銭の影響があるとして論を進めた。唐代において紙銭が代替した瘞銭の機能とは、現世から冥府へお金を送る際の「遠隔地送金システム」であった。それまで被葬者は銭貨を身に着ける、もしくは手に持って冥府へと向かっていたものが紙銭の出現により事前に送金することが可能となり、結果として唐代の瘞銭の出土点数の減少、被葬者の所持意識の低下という特徴を生じさせた結論付けた。

ただし、前章でも触れたが、本来であれば唐代の瘞銭と比較するのであれば、魏晋南北朝時代の瘞銭を対象とすべきところであったが未集成のためやや時期の離れた漢代との比較となった。今後、魏晋南北朝時代の瘞銭の集成を行うことにより、春秋戦国時代から唐代の瘞銭の中に、紙銭の出現と地域ごとの広まりの痕跡を見出すことが可能となると考えており、今後の課題としている。

本稿の目的とした唐代の瘞銭と紙銭の比較によりその関係性の一部が見えた。唐代における紙銭の機能とは現世から冥府への送金システムであり、その使用は時に墓地の外にも及ぶ。一方、瘞銭の機能とはあくまでも墓内にて完結するものであり、その中の被葬者に銭貨を所持させて冥府での日常的な財貨とする機能は紙銭で代替が可能なものであった。

許飛2010は「祖先の祭祀には葬儀と祭祀の二種類の扱い方がある。「瘞銭」はただ葬儀の時だけのやりかたであり、紙銭は葬儀と祭祀の両方も利用される。その用途の違いを無視して、単にそのやり方を比べるという考え方は問題である。」としており卓見である。唐代における瘞銭と紙銭の関係性とは一部の機能が重なるといったものであり、「紙銭の源流は瘞銭である」と断言してしまうことにはやや問題を感じる。一方で、紙銭の出現が、瘞銭の中の冥府への銭貨の運搬事情を変化させたことも事実であり、正しくは「瘞銭の機能の一部を紙銭が担うようになった」とすべきであろう。

我々が紙銭を紙銭として捉えることができる背景には、唐代から現代までこの習俗が連綿と続いてきていることがある。物事の移り変わりの激しい現代社会において、このような習俗・伝統が今日も残されていることの価値を正しく認識し、次世代に繋ぐために、当館の紙銭コレクションとその整理・研究が一助となれば幸いである。

註

- (註1) 駒澤大学禅文化歴史博物館では、旧文学部文化学教室（現：総合教育研究部文化学部門）から窪徳忠氏（東京大学名誉教授、駒澤大学非常勤講師）旧蔵の道教関係資料の寄贈を受け、収蔵している。2003年には企画展「道教の世界－中国の神々と文様－」と窪徳忠氏の講演会を開催した。2011年には企画展「紙銭の世界」と鈴木一馨氏（〈公財〉中村元東方研究所専任研究員、本学非常勤講師）によるセミナー「紙銭の世界」を開催している。2014年には企画展「道教の世界Ⅱ－沖縄・台湾・中国の民間信仰－」を開催している。
- 道教関係資料については、企画展図録「駒澤大学禅文化歴史博物館所蔵道教関係資料1－紙銭編－」（2011年5月）と「駒澤大学禅文化歴史博物館所蔵道教関係資料2」（2014年10月）を刊行している。
- (註2) (唐) 封演『封氏見聞記』卷六「紙銭」台北・藝文院書館 1966年
書き下しは許飛2010「唐代小説にみえる「紙銭」について」を参考とした。
- (註3) 『封氏見聞記』の引く『漢書』卷59「張湯伝」の記事に魏・如淳が註して「瘞は埋也。銭を園陵に埋めて以て死を送る也。」とあり、副葬品の一つとして墓に銭を埋納する行為、もしくは埋められる銭そのものが瘞銭とされる。
- (註4) (宋) 戴埴『鼠璞』「寓銭」台北・藝文院書館 1965年
- (註5) 道忠（無著）撰『禪林象器箋』東京・誠信書房 1963年
- (註6) 『禪林象器箋』第29類銭財門 P854
- (註7) 陳啓新1996「冥紙史考」『中国造紙』“筆者認為殷長堪的可能性最大（以降略）”
- (註8) 唐太宗撰『晋書』列伝54卷「殷仲堪伝」商務印書館 1934年
- (註9) 五斗米道とも言う。後漢末に張道陵によって創始された太平道と並ぶ道教の源流。
- (註10) 陸錫興2010「唐宋時期的紙銭風俗」『文史知識』“殷長史即殷仲文、東晋著名文学家、曾為劉裕鎮軍長史”
- (註11) (唐) 李延寿撰『南史』卷5「東昏侯本紀」中華書局 1975年
- (註12) (宋) 歐陽脩、(宋) 祁奉勅撰『新唐書』卷109「王璵伝」上海・商務印書館 1936年
- (註13) (宋) 朱熹[述]；黎靖德編；王星賢点校『朱子語類』卷138「雜類」P3283 北京・中華書局 1986年
- (註14) (宋) 王应麟『因学紀聞』臺北・臺灣商務印書館 1966年
- (註15) (宋) 歐陽修撰；(宋) 徐無黨註『新五代史』「周本紀」北京・中華書局 1974年
- (註16) 許飛2010「唐代小説にみえる「紙銭」について」『中国中世文学研究』57号
- (註17) (清) 徐乾學[撰]『讀禮通考』南京・江蘇書局 1881年
- (註18) 全唐詩425・1075下
- (註19) 全唐詩298.747上
- (註20) 余欣2012「冥幣新考：以新疆吐魯番考古資料為中心」『世界宗教研究』2012-1
- (註21) 趙叔才・楊広才2015「紙銭考略」『民俗研究』2005-1
- (註22) 伊藤富雄1951「紙銭習俗考」『支那学研究』1951-7
- (註23) 説話研究会『冥報記の研究』勉誠出版 1999年
- (註24) 註10参照

- (註25) (宋) 李昉『太平廣記』卷385再生11 台北・新興書局 1979年
- (註26) 同上 卷350「許生」
- (註27) 同上 卷330「楊元英」
- (註28) 前掲『冥報記の研究』では錫を鉛と解釈している。
- (註29) 但し、王梵志の詩中の紙銭について余欣2012は現在の葬儀の際の路銭（辻などに溜まる無縁霊などを懐柔し、葬儀の邪魔をさせないために撒く紙銭）と近似するものと捉えており、この折には紙銭を燃やすことはない。
- (註30) 永尾竜造『支那の民俗』磯部甲陽堂 1927年
- (註31) 李約瑟『中国科学技術史』第一分冊紙和印刷 1990年 P99に資料写真あり。
- (註32) 陸錫興2006「吐魯番古墓葬紙明器研究」『西域研究』2006-3
- (註33) 孫麗萍2014「吐魯番古墓葬紙明器考論」『吐魯番学研究』2014-2
- (註34) 伊藤富雄1951は「中国に仏教が伝来して、荼毘の教は流行したのであるが、瘞銭から焚銭に変わる為には、この宗教の力によつたに違ひない。」とする。高国藩『敦煌民俗学』は「敦煌盛行仏教、仏教倡導火葬、故改瘞銭為焼紙銭、由此伝播至全国。」とし、仏教の火葬と紙銭を直接的に結び付けている。一方、許飛2010は唐・道世（?～683年）の『諸経要集』、唐・一行（683～727年）の『七曜星辰別行法』、唐・不空（705～774年）の『焰羅王供行法次第』などの唐代の仏教書に紙銭が見えることを指摘し、「仏教が紙銭を扱い、積極的に関与したことは明白」としている。ただし、「利用していたといつても、紙銭は仏教の思想とは全く別のことである。」とし、仏教が紙銭を使用し始めたとはいえないと分析を行っている。
- (註35) 王雪農1998「中国的冥幣瘞銭及其演变过程」『中国錢幣論文集』第3集 中国金融出版社は、冥幣は喪葬のために価値のない素材によって実物貨幣を模して制作された明器であり、瘞銭は喪葬に用いられるのは同様であるが実物貨幣あるいは実幣貨幣を改造したもの、もしくは銅、金、銀、玉などで制作したものと定義する。
- (註36) 中国社会科学院考古研究所『洛陽燒溝漢墓』科学出版社 1959年
- (註37) 佐藤大樹2014「漢代墓葬出土銭の研究－洛陽・西安周辺の事例から－」『中華文明の考古学』同成社
- (註38) 詳細は佐藤2014 273～275頁を参照
- (註39) 詳細は佐藤2014 275～277頁を参照
- (註40) 佐藤2015「東アジアの中の貨泉」『駒澤考古』40号 駒澤大学考古学研究室
- (註41) 瘞蔵銭は一カ所から纏まって出土する銭貨であり、日本では備蓄銭、埋蔵銭、一括出土銭などとも呼ばれる。
三宅俊彦2005『中国の埋められた銭貨』（同成社）では、備蓄銭、埋蔵銭など埋められた目的を想起させる名称ではなく、単に「人為的に埋められた銭貨」の総称と定義しており、本稿もこれに従う。
- (註42) 佐藤2015 322～323頁 表3・4参照。
- (註43) 王建宏2009「魏晉薄葬形成的原因考述」『伝承』2009-1
- (註44) 蔡明倫2002「魏晉薄葬原因探析」『湖北師範学院学報』（哲学社会科学版）2002-2
- (註45) 三国時代において魏の影響下になかった呉、蜀の出土事例は除く。各遺跡の発掘報告は以下の通り。
「甘肅安西旱湖塋墓地、罌址発掘簡報」『考古与文物』2004-4、「安康西晋紀年墓出土五銖銭」『陝西金融』1994-2、「北京市石景山区八角村魏晉墓」『文物』2001-4、「洛陽谷水晋墓」『文物』1996-8、「嵩県果酒厂晋墓発掘簡報」『中原文物』2005-6、「洛陽衡山路西晋墓発掘簡報」『文物』2005-7、「洛陽澗河東岸発現的一座西晋墓」『文物』2007-9、「浅論高崇墓葬銭幣的歷史價值」『中原文物』1997-1、「大冶河口鎮六朝早期墓」『江漢考古』1999-2、「湖南省益陽県晋、南朝墓発掘簡況」『文物資料叢刊』第8集、「浙江安吉三官郷的1座六朝初期墓」『考古通訊』1958-6、「浙江省紹興官山 西晋墓」『文物』1991-6、「浙江金華古方六朝墓」『考古』1984-9、「敦煌新墓」『考古』1974-3、「安徽合肥東郊古磚墓清理簡報」『考古通訊』1957-1、「湖北老河口市李楼西晋紀年墓」『考古』1998-2、「安徽馬鞍山桃冲村三座晋墓清理簡報」『文物』1993-11、「咸陽平陵十六国墓清理簡報」『文物』2004-8、「武威發現一座東晋墓葬」『文物報』1987-2-20、「甘肅武威十六国墓葬清理記」『文物』1993-11、「南京隱竜山南朝墓」『文物』2002-7、「湖北秭師石門嘴遺址発掘」『考古学報』2004-4、「湖北均県“双冢”清理簡報」『考古』1965-12、「江蘇省邗江発現兩座南朝梁画像磚墓」『考古』1984-3、「江西南昌徐家坊理六朝墓清理簡報」『考古』1965-9、「広西壮族自治区梧州豊民坊南朝墓」『考古』1983-9

- (註46) 全漢昇1976『中国経済史研究』 崇文書店 P255参照。なお、前漢の前118年から元始年間までの約120年間の鑄造量は200億枚とされ、平均すると年2億枚弱の銭貨が鑄造されたことになる。
- (註47) 王維坤2001「隋唐墓葬出土口中含幣習俗溯源」『考古与文物』2001-5、王維坤2003「絲綢之路沿線發現的死者口中含幣習俗研究」『考古學報』2003-2
- (註48) 劉枝萬1981「中国の死喪儀礼における死靈観」『東アジアにおける民俗と宗教』は、被葬者の口内に珠玉、米貝・金銭を入れる「含」を取り上げ、「おもうに古代人は靈魂を自由に活動しうるものと考えていた一面があるにしても、事実後世の俗信では肉体という住家における靈魂の一定の門戸を合理的に想定している。(中略)しかして最も思いつかれやすいのは体内に通じる竅であり、耳・鼻・口・尻がこれに属し、諸竅のうちでもとくに食道に接続する口腔が目立ち、いわば表玄関に相当し、靈魂の交通路の要衝を扼しているわけである。ゆえに現俗に鑑みる限り、含は死靈の体内繫留と、外邪の侵入を防止する、二重作用と解すべきであろう。」としている。
- (註49) 劉枝萬1981「中国の死喪儀礼における死靈観」『東アジアにおける民俗と宗教』 吉川弘文館
- (註50) 江西省文物工作隊1982「江西南城明益宣王朱翊鋐夫婦合葬墓」『文物』1982-8
- (註51) 湖北省文物考古研究所2007『張懋夫婦合葬墓』 科学出版社

(さとうだいき 駒澤大学禅文化歴史博物館学芸員)